

連載「わたしの福祉論」75

試練を受けとめるまなざし

弘前学院大学大学院  
社会福祉学研究所

教授 八巻正治

今から数ヶ月前のことでした。私の友人が通院していた精神科病院へ行くと、彼が独りポツンと待合室のイスに座っていました。ひどく疲れている様子でした。そこで長イスに並んで座り、「人生って、いろんなことがあるよねえ。」などと話しながら、しばしの時を共有しました。

クリスチャンである彼は、だれに対しても誠実、かつ不公平感なく接してきました。そうした、まるで「誠実のかたまり」のような人間が、まことに理不尽なる行為を受けて「うつ病」の診断を下され、疲れ切った表情で精神科病院の待合室に佇んでいたのです。そんな彼の姿を見ると、ほんとうに可哀相でした。いつの世も、こころ優しき人が傷つき、疲れ果ててしまうのです。

神さまは、ご自身が格別に愛する者を選び、主の聖徒としてのブラッシュアップ(錬成)のために、ひとときの間に、必要な試

練に遭わせるのだと思うのです。しかしそれは、あくまでも「ひとときの間に」なのです。とても苦しい「ひととき」ですが、最善以下のことは決して為されない神さまの愛のご配慮を信じ抜くことが大切だと思うのです。

神の聖徒

二月十七日の主日礼拝で、胃ガンで療養中の信徒さんによる、こころ揺すぶられるお証しを聴くことができました。かなりやつれた表情でしたが、その表情には喜びが満ち溢れていました。

「医師から告げられた私の命は、あと三ヶ月だそうです。…」そう彼女は語り始めました。その後、十分間あまり、用意してきた原稿を読みながら、神さまへの感謝と喜び、さらには残されてゆく者たちへの配慮を語りました。そして「この地上から肉体はなくなっても、天国において、みなさんを見守っています。天国でお会いできることを楽しみに待っています!」と、笑顔をもってそのスピーチを結びました。

私はそのお証しを聴き、「神の聖徒」に出会ったような、そんな心地よい衝撃を感じました。そしてそれは、私自身も「かくありたい!」と思わされるような凛とした体験でした。

ひとが死ぬ間際に発するメッセージは、

とても荘重なものです。そうしたギリギリの時に、神さまへの感謝と喜びを明確に語ることで、そうした信仰こそがホンモノだと思うのです。

それから一ヶ月後の三月二十日に、病室の彼女を見舞いました。しかしもう話すことができなくなっていました。しきりと涙を流していましたが、その顔は微笑んでいました。それは愛なる神さまによつて、地上から天上へと移されることを心底から信じているといった、静かで清んだ微笑みでした。

こうして神の忠実なる聖徒は、それから五日後の三月二十五日に静かに召され、地上から天上へと、その住まいを移していったのです。わずかに四十七歳の地上での生涯でした。

私たちはみな等しく、いつ召されるとも知れない限られた地上での命を生きています。それゆえ、不必要なる嘆きや悲しみに沈んでいる時間などないのです。物質的な欲望の充足などに心を奪われているゆとりなどないのです。ゆえにこそ、与えられた地上での生涯を、精いっぱい、かつ喜びをもって前向きに歩みたいと思うのです。

神の優しさ

「もしも神や仏がいるならば、そして神仏を信じていながら、どうしてこんな理不

尽で、辛く厳しいことが起こるのか？」といった発言を、ときおり耳にすることがあります。辛く厳しい状況に置かれている当事者の方にとつて、そう思いたくなるような気持ちはよく理解できます。

これについて、かつてノートルダム清心女子大学の学長をされた渡辺和子シスターは、次のように述べています。

「神の優しさは、試練を与えないことよつて示されるのではなく、試練に耐える力を添えることよつて示される。」(『愛をこめて生きる』PHP研究所 一九八九年)

すなわち、私たちは感謝できないような厳しい状況に置かれたときに、そうした試練に耐え得る力を添えてくださる神さまのご配慮や優しさに感謝をすべきである、とシスター渡辺は言われるのです。厳しきながらも、まことに深い洞察に基づく珠玉のまなざしだと思ふのです。

私たちは、ときとして自らもまた苦難や試練にさらされることがあるがゆえに、同じくそうした厳しい状況下に置かれている人たちの気持ち共感的に理解できるのではないかと思ふのです。「辛くて苦しいのです。」そう語る人に対して、「あなたの辛いお気持ちにはよく解りますよ。私自身もそうした歩みを重ねてきましたから。」と静かなる微笑みをもって相手の状況があるがままに受け容れることができるのだろうかと思

うのです。

そのためには、私たち自身が愛なる神さまから、さらなる試練の機会を与えていただき、それによるところの修練を重ねてゆかねばならないのだと思ふのです。そう、必要な試練は自己向上の糧でもあるのだから。

### 選別の試練

集団赤痢の後遺症によつて全介助状態になった、故・水野源三さん(一九三七―八四年)の詩の中に「有難う」という詩があります。

物が言えない私は

有難うのかわりに ほほえむ

朝から何回も ほほえむ

苦しいときも 悲しいときも

心から ほほえむ

ひとが、苦しいときに苦しいと言い、悲しいときにその悲しみを素直に表現するのは、決して間違つてはいないと思ひます。それに対して「まばたきの詩人」と称された水野源三さんは、この短い詩の中で、苦しいときにも悲しいときにも、(否、むしろ苦しく、悲しいからこそ)心からの微笑み

を向けることの大切さを表現しています。厳しい試練や苦難の歩みに裏打ちされた源三さんの深きまなざしを、ここにみるかのようです。

ギスギスした重苦しい雰囲気深く蔓延しているかのような現代社会のなかで、人びとの多くは強いストレスや苛立ちを覚え、ときとしてそうした鬱積の刃を、他者への攻撃や社会への不平不満を表現することよつて発散させようとしています。またこれとは逆に、激しい自己否定の結果として、リストカット行為に陥つたり、自らの命を絶とうとする人たちもいます。

苦しみや悲しみは、確かに辛く厳しいものです。しかし、いっぽうで、愛なる神さまからの「選別の試練」による修練は、自分自身の内面が磨かれてゆくための良きチャンスともなり得るのだと思ふのです。

さらには、そうした修練を通して、同じような苦しみや悲しみにあえいでいる人たちを、より深いレベルで共感的に理解できるようになれるのだと思ふのです。

ですから、絶えず襲いかかる苦しみや悲しみに押しつぶされることなく、成長のために必要とされる試練や苦難をしっかりと前向きに受けとめたいと思ふのです。できれば源三さんのような「微笑みのまなざし」をもって……。とても、とても難しいことだけど。